

1P153

幼児の体格評価の類型による栄養・食事指導の検討

生魚 薫、鈴木 葉子、杉原 茂孝

和洋女子大学大学院 総合生活研究科

【目的】

乳幼児健康診査は、3歳児までを法的義務とし、それ以降の実施は自治体に委ねられている。そのため保育所の3歳～6歳児（就学前児）の健康管理は、学童期に向けて重要な役割を担う。本研究は、栄養・食事指導の具体的方法を見据え、身長・体重成長曲線及び肥満度を用いた体格評価の類型による栄養素・食品群摂取量の検討を実施した。

【方法】

東京都A区の保育施設に通園する3歳～5歳児クラスを対象とし、保護者に調査票を配布した。内容は、栄養指導に関する調査と簡易型自記式食事履歴質問紙を実施した。園児の出生体重から2020年12月までの身長・体重計測値を用い、身長・体重成長曲線及び肥満度曲線を描き、体格変化のない群（以下、標準体格群）、肥満度減少群、肥満度増加群の3群に分け、栄養素及び食品群別摂取量の比較を行った。

【結果】

対象は90人で、同意が得られ調査回収した人数は、25人（27.8%）であった（クラス内訳が3歳10人、4歳3人、5歳12人 性比は男児13人、女児12人）。栄養指導の希望内容は24人が回答し、9項目中、偏食が11人で最も多く、食事や栄養バランス、食事の適量については8人であった。栄養素摂取量の平均±SDは、推定摂取エネルギー（以下、E摂取量）で、標準体格群（19人）1293±375.1kcal、肥満度減少群（5人）1246±180.0kcal、肥満度増加群（1人）1274kcalであった。栄養素エネルギー比率（以下、栄養素E比）では、たんぱく質E比、脂質E比、炭水化物E比の順で標準体格群14.3±2.5%E、30.1±6.0%E、55.6±6.9%E、肥満度減少群14.1±0.8%E、29.2±4.6%E、56.7±4.8%E、肥満度増加群12.2%E、25.4%E、62.4%Eであった。

【考察】

まず、保護者1人を除き何らかの栄養指導内容の希望があることがわかった。E摂取量は、過小申告の可能性も考えられるが、栄養素E比からみても個人差が大きい。今後は、対象数を増やして検討していく。肥満度減少群では、指導内容の希望からも、児の食事量に対する評価と食行動の具体的な支援が求められていると考えられた。肥満度増加群では、3歳児健康診査以降の定期的なフォローが必要と考えられた。標準体格群は、集団指導を中心に、肥満度減少群・肥満度増加群は、個別栄養・食事指導の在り方を検討する必要があると思われる。

1P154

離乳完了前後における授乳状況と摂食状況との関連性の検討

大杉 佳美¹、阿部 晃子²、大島 茜³、星野 真志³、町屋 佳子²、黒石 純子²¹ピジョン株式会社 国内ベビー・ママ事業本部²ピジョン株式会社 中央研究所³株式会社マクロミル

【目的】

離乳食は生後5,6ヵ月頃に始まり生後18ヵ月頃までに完了を迎え、これまでの乳汁摂取メインから固形物摂取が加わり、乳児嚥下から成人嚥下へ、歯を使った咀嚼へと摂食機能が発達していく。一方で、離乳の完了がすなわち、乳汁摂取を止めることではなく（授乳・離乳の支援ガイド、2019）、離乳完了前後の時期に授乳と摂食のどちらも行なっている児は一定数おり、乳汁の与え方と摂食機能の発達や食事の偏りとの関連性を指摘している研究もある（曾我部ら、2014）。そこで本研究では、離乳完了前後の児の授乳状況と摂食状況の実態を把握し、それらの関連性について検討した。

【方法】

生後9ヵ月から3才11ヵ月の子を持つ母親764名が参加した（有効回答数512名）。2020年1月30日から2月4日においてWebアンケートにより、授乳状況（授乳形態、回数、時間・量、授乳している理由等）、摂食状況（離乳食の段階、食材の大きさ・量、使用中食具、食べ方等）、水分摂取状況、乳歯の萌出状況、口腔習癖、粗大運動の発達状況等全38項目を聴取した。本研究は、株式会社マクロミルに調査委託し、うえのあさがおクリニック倫理審査委員会の承認を得て実施した（ウ倫第2019-43号）。

【結果】

離乳完了前から完了後にかけて、乳汁を与えるタイミングは直接母乳、びん授乳ともに、起床直後、夜寝る前、夜間が主となり、「子が欲しがらから」が最も多い理由へと変化していた。また、離乳食、幼児食いずれの場合も、卒乳している児と比較すると、授乳している児は偏食や小食の傾向が伺えた。同様に、卒乳している児は手づかみ食べや食具を使って自分で食べるといった自食の割合が高いのに対し、授乳している児は、食べさせてもらっている割合が高い傾向にあった。水分摂取では、哺乳びん使用者は、水分摂取容器としても哺乳びんを用いている様子が認められた。

【考察】

離乳完了後の授乳は離乳完了前と比べ、与えるタイミングや理由が変化していることが分かり、また、授乳している場合には、偏食、小食、食べさせてもらうといった自食に対して課題を抱えている可能性が推測される。よって、授乳による児の精神的な安定を大切にす一方で、自食を育むための離乳完了後の授乳と摂食の在り方について、口腔機能発達への影響も含めて、さらなる検討が必要であることが示唆される。